

## 私立学校教員海外研修参加報告

### 「アメリカの21世紀型スキル教育・アクティブラーニングの実践」

真中 昭典

今回の研修で訪れた学校に共通して言えることだが、日本の小学校よりもはるかに進んでいることが山ほどあった。

その一つとして挙げられることは、今日本の教育界で流行語のようにになっている「アクティブラーニング」への考え方である。日本で考えて進められているアクティブラーニングのほとんどは、グループ活動を通じて話し合いをさせたり、何か調べ学習をしてプレゼンテーションをしたり、問題の解き方を考えたり、合作を作ったり、プログラミングをしたり、と様々であるのは皆さんもご存知のはずだ。しかし、これらの学習展開のプロセスやめあては教師が設定していないだろうか。発問は一方通行ではないだろうか。つまり、これではクリエイティブは一切生まれないのだ。

アメリカではテーマは児童が学びたいものを自ら設定し、プロセスを自ら作って考えていくことで理解し、それらについて様々なリサーチをし、自ら仮説を立てて検証をしていく。そしてこの経験を基に、その次のステップを考えて進めていく。つまり本来教師のあるべき姿は、児童のやる気を引き出し、そのプロセスにおいて助言をしたり、ツールを揃えてあげたり、クリエイティブな発想に導く教材を与え、手法を教えることだと考えられている。この姿勢は、自由学園でも十分通じるものであり、目指すべき姿であると感じた。そこで今回訪問した内の一つ、Stevens Cooperative School の実践例を中心にこの場をお借りして紹介する。

#### I 学校概要

Stevens Cooperative School は、ニューヨークからハドソン川を渡ったニュージャージー州西部のホーボーケンとニューポートにビルでキャンパスを構える幼小一貫校（2才児～8年生）である。1949年に設立され、現在は学校の近郊から約430名の児童が通っており、約80名のフルタイムで勤める教職員がいる。

1クラスのほとんどが児童18～20名に対し、教師は2名体制で構成されている。3年生までは児童のスキル別にクラスが構成されており、教師は主に、実際の活動を主導する教師と、活動時の児童のスキルを見る教師とで役割分担が成されている。またアフタースクールも充実しており、様々なプログラムが用意されているのも魅力の一つだ。主にプログラムは、教師の得意分野によって構成され、四季折々の様々なスポーツ（アスレチックチーム）の他に、アート、ロボティクス、エンジニア、シアター、フォトグラフ、ファッションなど実に様々なジャンルを網羅している。

Stevens Cooperative Schoolに限らず今回訪問した他校でも同様に、学習環境の充実に関しては、日本の私立学校に比べてとても充実していると感じた。その背景には、私立学校に対する考え方が日米では大きく異なるということもあるだろう。学校に対する児童数に関しては日本と比べて少ないことが多いが、その分高額な学費を各家庭

が納めている。日本では年間約100万円前後が主であるが、アメリカでは年間約500万円前後という大きな差があった。教育に対する資金投資の考え方の差が、学習環境の充実性に差をもたらしているという事実は避けられないだろう。

#### II カリキュラムについて

アメリカの私立学校ではどの学校のとても特色あるカリキュラム構成が存在している。本校では2学年ごとに大まかなカリキュラムが分けられていた。もちろん内容のレベルは学年によって異なるが、一貫していることがあった。それは、児童の興味やスキルによって柔軟に授業で扱う内容や手法を提供していくことである。これにより、児童が自ら考え、探求心を持って学習に取り組むことができ、社会情勢や児童の実態に対してもスピード感を持って対応することが出来ていた。つまり、教師はそれぞれの課題で必要になるスキルをpushした上で、柔軟に対応することと児童が学びたいと思わせる環境作りに徹することが出来るという訳である。各教室のICT環境はもちろん、図書や学習に必要な道具は申し分ないほど揃っていた。

##### 【カリキュラム例】

Reading, Writing, Science, Social Studies, Literature, Math, Physical Education, Spanish, Music, Technology, Art, Movement,

Community Building、Health、Trips、World Languages、など

また一つ興味深かったのは、今回訪れたほとんどの小学校で3・4年生（アメリカの小学校は4年生が最上級生）がミックスされたクラス構成がなされていたことである。その理由としては、4年生がリーダーシップを身に付けるほか、中学校に上がる準備や、3年生が次年度にスムーズに最上級生の役割を果たせるようにするためでもある。子どもによってはこのようなスキルを1年間で習得出来ないため、2年間という余裕を持っている。学習においても、様々なアイデアが生まれ、コミュニケーションの幅も広がるであろう。ただし、数学だけは学ばなければならないスキルが異なるため、別々に学習をする。

このように、2学年で学校生活を送るメリットはとても大きいだろう。日本でも今後、異学年同士で学習する機会が増えることは期待出来そうだ。

### III 実践例

ここからは実際に視察した学習の一部を紹介する。学習する内容（課題）は特別変わったものではないが、教科によって様々な手法が用いられていたことが興味深かった。Math以外のほとんどにプロジェクト学習が用いられており、教科を横断してTopicが扱われていた。

#### 1. Math

##### ・1年生 1~100の数の学習

【教材】

1から100までの数が順番に記された紙を、縦横ある程度のまともりにして切り、パズル状になったものを用いる。



【学習活動】

グループに分かれ、ディスカッションしながら法則を見つけ、バラバラになったものを元の状態にする。

1の位が同じだと、10の位が10→20→30と数が規則的に変わっていくことに気付く。また表の中で斜めに読むと、50が25の倍や90が45の倍や100が50の倍であることなどにも気付くことが出来る。

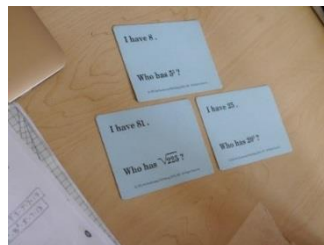
#### ・8年生 $\sqrt{\quad}$ と二乗の学習

【教材】

「I have 16. Who has  $\sqrt{100}$ ?」

「I have 10. Who has  $50^2$ ?」 など

$\sqrt{\quad}$ と二乗の質問と答えが書いてあるカードを用いる。



【学習活動】

ゲームを通じて行う。児童全員がカードを1枚持ち、カードに書いてある内容を理解しながら、声に出しながら順番に読んでいく。読み上げられた内容（ルートと二乗の答えと質問）を、瞬時に暗算によって出し、全員が終わるまで続ける。

数の感覚ゲームを通じて身に付けることが出来る。

#### 2. Science

【学習の進め方】

授業を行う上で大切なこと分野に分かれて学ぶが、与えられたTopicを児童がリサーチをして、解決する学習方法である。



- ① Topicについて、五感を使ってまず考える。
- ② 考えたことについて、リサーチをする。
- ③ リサーチに基づき、実験結果についての仮説を立て、予測をする。
- ④ 実験をする。実験方法や留意点なども自分達でリサーチして行う。
- ⑤ どのようになったかをまとめ、プレゼンター結論をレポートにまとめ、Google Chromeへ提出。

教師は各過程を評価すると共に、道具の貸し出しや安全監視なども行う。

#### 3. プロジェクト学習

「Projectは将来に必ずつながる視点や力を持つ。」と視察先の教師は口を揃えていた。また、オリジナリティやクリエイティブな感覚を身に付けさせるために、とても大切にしている学習の一つである。Artとのコラボレーションは当たり前のように行われ、様々な視点を養う上では、非常に重要視をしていた。子どもの探求心を大切に、大人はそれを伸ばす手助けや自由のバリエーションを増やしてあげる役割がある。また教師は

その為の理解や今後のアプローチについて、日々ミーティングを重ねている。

## ・2年生まで ブロック・ビルディング (Social Studies, Community Building など)

### 【めあて】

自分達でゴールを設定し、ブロックを使い、作り上げる。児童の探求心を伸ばす。

### 【指導上の留意事項】

リアリティーを求め、考えさせていく。



例えば、「その施設はなぜ役立っているのか。」「建設する上で必要なものは何か。」「その建物はどのような構造をしているのか。」などを考えさせる。

### 【学習活動】

「町やビルで働く人はどんな仕事をしているのか。」ということを実際に行ってみて、インタビューをして学習を深める。クラスに戻り、ディスカッションをしながら、手を動かし完成させる。この学習を低学年で行うことで、3年生以降自らリサーチしていく力の基礎が形成される。

【児童が作った例】 警察署・消防署・映画館・パン屋さん

## ・3・4年生 テーマを選んで研究を進めていく

個人で興味が違うため、様々なテーマがある。今後児童同士でディスカッションを重ね、テーマを選別し、学習を進める予定とのこと。(※訪問時は初回の授業だった為、今後の展開は不明。)

【児童が挙げた例】ローマ字、オリンピック、ペレ、昆虫、サメ、イルカ、ブラックホールなど

## ・ナイル川 (Science, Social Studies, Art など)

Social Studies ではエジプトの歴史はもちろん、川に関わる人々の暮らし(衣食住)や地形を、Science ではエコシステムや川の働きを学ぶ以外に、Art と共同で地形がどのように作られるかを学ぶこともある。また、Art ではナイル川の流れを作品に表現するほか、エジプト美術(絵画・衣装)の美しさやそれらが持つ機能的な面について学ぶなど、「ナイル川」を様々な視点から掘り下げていく。

## ・6年生 目 (Reading、Social Studies、Art、Community Building など)

この「目」というテーマは他学年でも取り組んでいたようで、とてもレベルの高いディスカッションを行い、考えがより深めることが出来ていた。

## “Website”について、どのような目で見えるか(ディスカッション)

【めあて】本の内容やトピックを深く探求や追及していく力をつける。

自分とは違う視点を理解することで、様々な価値観を理解し、互いを尊重していくことを学ぶ。

【学習方法】ディスカッションは色々な角度から物を見ることが出来て、様々なこと共有することで理解を深める。ちなみに当日行われていたディスカッションでは、「一つの情報だけで判断するのではなく、複数の情報を元に物事を考えていくことが大切」、「戦争のこと(それぞれの国の考えや視点)」、「情報が溢れていること」、「経験を積んで理解していくこと」などの内容が児童から挙がっていた。

### Art

小さい学年は目を描くといってもただ見たままの目を描くだけだが、6年生になると目という絵で様々な視点を表現する(考える)ことが出来るようになる。そこには倫理観はもちろん、クリエイティブな表現方法も加わってくる。例えば、目から涙が流れている絵があるが、その涙が血に染まっているというようなことである。

一つのものから想像できる(訴えかける)視点を作品に表現する力が求められている。このようにArt は様々なテーマと関わりながら、学年が上がるにつれて象徴的なものを表現する活動が多くなっているのが特徴でもある。

## IV まとめ

アメリカではアクティブラーニングと考えられている学習はもう流行っておらず、今現在は“クリエイティブ”と“テクノロジー”という二つのキーワードで溢れていた。

クリエイティブとは、「新しいアイデアを出し、アイデアを重ねて、チャレンジしていくこと。」「とても多種多様であり、必ず何かに返ってくるものである。」と考えられており、とても大切にしていかなければならない教育の要素であると話があった。現場を実際に見てもそれを感じた。

また、テクノロジーという言葉は流行した背景には、インターネットの普及とともに、英語圏のペーパーレス化が進み、技術の急速に発展したことが大きく影響している。ほとんどの企業でペーパーレスとなり、資源とコストダウンの観点から、今や取り組んでいない学校はなかった。

この“テクノロジー”は、「これから社会に出て行く子ども達が当たり前ツールとして身に付け、活用していくことが目的」であり、「情報やツールをどう生かすか、どう使って考えていくか」が求められている。その為、ipadやMacBookAirを持つ生活

が当たり前になり、それらを使って学校生活を送ることに違和感が全くなかった。テクノロジーを学ぶ上で多く利用されているプログラミングも、クリエイティブな思考を身に付けるために重要視している。遊びの延長で行うことで学習意欲を高める効果があり、自然と身についていくのだ。

次の学習指導要領の改訂においてこれらの要素がより深まることが日本の教育界に期待されているが、学校側としては改訂されてから実施していくのでは社会の流れに確実に遅れが生じることは目に見えている。そのため、教育環境の整備と教員(教育)の質を上げていくことが、今の日本の学校教育に求められている最大の課題だと、私は感じた。

今後も日本では、アクティブラーニングのような様々な教育の手法が試され、研究されていくことが予想されるが、私たちが相手にしているのは「将来の日本を作り出す人材」であることを深く心に留めた上で、「何が本当に大切であり、そのために学校や教師が出来ることは何か」をしっかりと見極めて、毎日を過ごさなければならないだろう。

最後に、今回の研修で、私たちが生きる世界の中心的存在とも言えるアメリカ東海岸にて、様々な価値観や教員人生に関わる問いを教えて頂いたことに心から感謝を述べるとともに、今後の日本の学校教育の発展を期待して、報告を終えたい。